

2 1 世紀の日本のかたち（68）

道州制-地域からの国づくり（その4）

— 四 国（州） —



戸 沼 幸 市

<（一財）日本開発構想研究所 代表理事>

1. 四国の地政学と歴史

古事記のイザナギの命、イザナミの命による国産みの物語によると、伊豫之^{いよのふたなのしま}二名島すなわち四国は淡道之^{あはちのほのさわけのしま}穂之狭別島（淡路島）について2番目に生まれています。（巻末参照）

この島は胴体は一つで顔が四つあり、それぞれの顔には名前があつて、伊予国をエヒメ（愛媛）といい、讃岐国をイヒヨリヒコ（香川）といい、阿波国をオホゲツヒメ（徳島）といい、土佐国をタケヨリワケ（高知）といい、と記述されております。四国という名称も、この四つの特徴的な顔に由来するとされています。

四国（徳島、香川、愛媛、高知県）は、面積 18,800 km²（対全国比 5%）、人口 400 万人弱（3,932 千人（平成 24 年国勢調査））ですが、GRP（域内総生産）は約 13.5 兆円（平成 22 年度）あり、これはハンガリーと同規模とのことです。

四国の地理は、黒潮の流れる広大な太平洋を足摺岬と室戸岬を先端にして弧状に受け止める土佐地域（湾）、そして東側は紀伊水道を挟んで紀伊半島（和歌山）、西側は豊後水道を挟んで九州（大分・宮崎）と対面しています。そして、北面は日本最大の内海、瀬戸内海に

面しています。

四方が海に囲まれた四国の陸地部は中央に近畿以西の西日本の最高峰、石鎚山（1,982 m）に連なる急峻な四国山地が中央構造線に沿うように中央部を東西に走っています。これを境に、瀬戸内海に面した北側は、温暖寡雨な気候であり、台風等の直撃も比較的少なく、大規模な河川は太平洋や紀伊水道に流れ込む形となっているため、水資源に恵まれず、過去幾度かの渇水にあっております。太平洋に面した南側は、沖合を流れる黒潮の影響を受けて冬でも温暖で、年間降水量が多い一方、高知県、徳島県南部では台風の来襲や集中豪雨も多く、洪水などの被害を受けております。山地から海に流れる川（四万十川、吉野川など）は、山間地に村々、海岸部に村や町、都市を育てていきました。

四国における人間居住の地政学的条件を要約すれば、太平洋に向き合う半月状の海岸線をもつ高知と、紀伊半島（和歌山）、九州北西部（大分、宮崎）と東西に近距離に対面してなによりも北側に瀬戸内という日本最大の内海に面していることです。

瀬戸内海は古来西日本における人や物、情報の一大交流空間であり、これを中国側と共

有しています。これら地政学的条件を実体化したのが、本州四国連絡橋（神戸・鳴門ルート、児島・坂出ルート、尾道・今治ルート）でしょう。

地質年代の歴史の教えるところによると2万年前には四国は中国、九州、紀伊半島と一体の陸であったのが、気候温暖化によって、やがて太平洋からの海流—紀伊水道、豊後水道、そして地中海に取り囲まれる独立した現在の地理、地形となりました。

そして、有史以来の四国の歴史は先土器時代、縄文時代、弥生時代と、かつて一体であった中国の南側や、九州北部、紀伊東側とほぼ同じ遺品、遺跡を残しております。

日本の歴史の展開の中で、畿内に大和政権ができ、律令によって地方行政区分が敷かれるようになった時、四国は紀伊の東側と一体の南海道にくくられております。

古代から中世にかけて武士団が台頭してゆく時代、四国は源平争剋の最終戦、屋島の戦い（1185年2月）にその舞台を提供しております。四国における武士団による地域の統治に係る区分はおおむね讃岐、阿波、土佐、伊予がベースであり、織豊政権時代から徳川江戸幕藩体制において、この領域を時々に、存在感のある大名が治めておりました。

日本の古代から中・近世にかけての文化史を特徴づける仏教の伝来とその広がりも四国にも現れております。

伊予の人、一遍が四国を横断し、西国九州まで仏教の伝道の足を延ばしています。

讃岐の人、空海（弘法大師）ゆかりの霊場、四国八十八ヶ所は、四国の沿岸を数珠状につないで、四国の宗教空間として、全くユニー

クであり、近代現代においても、巡礼する人々は絶えず、今も生きております。

江戸幕藩体制から明治維新へ、この時の立役者、坂本龍馬や板垣退助らが太平洋に面した土佐藩から出ているのが興味深いところです。太平洋を日々眺めて、来たるべき地球時代を予感したのかもしれませんが。土佐の少年、ジョン万次郎がアメリカの捕鯨船に拾われ、通訳として日本の開国に一役買ったこととも重なります。

四国における近代化、工業化については、瀬戸内海が石炭や工業資材の輸送海路として重要な役割を果たすなど、四国は中国側と一体になって発展してきた経緯があります。

三本の本四架橋はこれを強化したいという四国側の願望の表れであったと理解されます。

2. 21世紀の四国ビジョン

「四国圏広域地方計画—癒しと輝く産業・ひとを育てる四国の創造」は急速な人口減少、超高齢社会に向かっている日本を10年先取りするかのように進行している四国社会がその未来像をどのように画くかはおおいに注目されることです。

「四国圏の課題」

●定住人口の確保

少子化に加えて首都圏などへの人口流出などによる人口減少、そして高齢化の急速な進展にいかに対応するか。

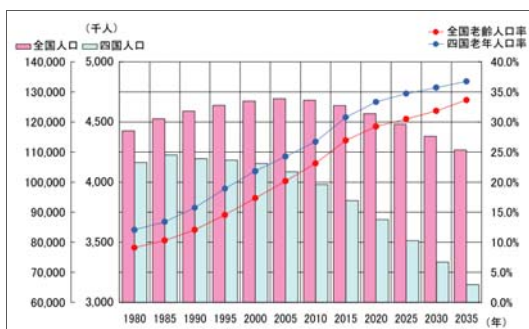
●災害や環境に対する安全・安心の確保

四国山地の太平洋側を中心とした山間部では、台風や集中豪雨による水害、土砂災害などが頻発、台風による高潮被害にどう対応するか。東南海・南海地震にどう対応するか。瀬戸内

海 の自然海岸の現象などに見られる自然環境の喪失の進行にいかに対応するか。人間活動と自然のプロセスが調和した物質環境の構築といかに取り組むか。

- 外部環境の変化に対応した産業活性化の展開
圏域人口の安定化のために、いかに産業活力を維持・向上させてゆか。既存産業の技術の高度化・高付加価値化のための企業をいかに創出するか。産学官連携の仕組みをいかに築くか。

人口減少+高齢化の急速な進行



資料：「四国圏広域地方計画 計画の概要」国土交通省 平成21年8月

- 豊富な地域資源の活用と魅力の創出
美しい圏土、自然資源や歴史・文化的な地域資源をいかに活用するか。中山間地域などの過疎化・高齢化の進行の中において、日本の原風景をいかに保ち継承していくか。
- 圏域内外における結びつきの強化
四国圏が一体となって中国圏や他圏域・東アジアを始めとする諸外国との連携をいかに実現するか。圏域内における人・もの・情報の循環をいかに活発化させるか。
- 中山間地、半島及び島嶼部の活性化と都市における活力の向上
耕作放棄地や管理されない森林の増加による水源涵養機能、CO2吸収源等の多面的機能低下による圏土荒廃をいかに防ぐか。都市部に

おける中心市街地の衰退を防ぎ、都市の活力をいかにたかめるか。

「四国の将来像」

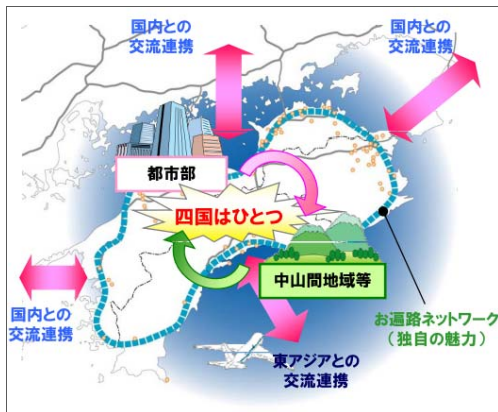
美しい自然風景、独自の歴史・文化、確かな力ある産業、個性ある一次産業や食物、多様な地域資源が各地域に存在し、受け継がれている。特に四国遍路に代表される「癒し」や「お接待」等の文化は価値観・ライフスタイルの多様化が進み、スローライフ等に対する関心が高まっている状況において四国圏にとって競争優位な分野である。四国圏がもつ「癒し」の魅力と独自の資源とに裏打ちされた経済活力とが相乗効果を発揮し、国内外との交流・連携を一層推進し、成長を強め、多様な人材を四国圏に引きつける。

四国圏広域地方計画は、このような姿として四国の未来像を画き、具体的な当面の目標を決めてプロジェクトを立ち上げています。

「目標」

1. 安全・安心を基盤に、快適な暮らしを実感できる四国
～心穏やかに暮らせるやすらぎの実現～
2. 地域に根ざした産業が集積し、競争力を発揮する四国
～グローバル化を生き抜く産業群の形成～
3. 歴史・文化、風土を活かした個性ある地域づくりを進め、人をひきつける四国
～おもてなしの心あふれた癒しの実現～
4. 東アジアを始め、広域的に交流を深める四国
～進取の息吹を与える交流の創出～
5. 中山間地域・半島部・島しょ部等や都市が補完しあい活力あふれる四国
～農山漁村と都市の共生～

四国圏の発展に向けた目標



資料：「四国圏広域地方計画の進捗状況について 概要」四国圏広域地方計画協議会、平成 25 年 9 月

「目標を実現する 10 の広域プロジェクト」

1. 人と文化を育む産学官連携プロジェクト
2. 緑の島四国の森林共生プロジェクト
3. 南海と瀬戸内の食彩展開プロジェクト
4. きらりと輝く技術力・健康支援産業クラスター形成プロジェクト
5. 圏内の連携による発展に向けた地域力向上プロジェクト
6. 防災力向上プロジェクト
7. 中山間地域・島嶼部活性化プロジェクト
8. 四国霊場八十八ヶ所と遍路文化により地域をつなぐプロジェクト
9. 瀬戸内フィールドミュージアムプロジェクト
10. 黒潮洗う南海輝きプロジェクト

四国の自然と歴史の上に築かれている現在の四国の持続的発展を目的とする 10 大プロジェクトは、いずれも重要なものであり、その成果が期待されます。

①は「四国はひとつ」という意識を共有し、将来を支える人材育成プログラムとして、四

国の 8 つの大学（徳島大学、鳴門教育大学、香川大学、愛媛大学、高知大学、四国大学、徳島文理大学、高知工科大学）が“e-knowledge コンソーシアム四国”を立ち上げて、「四国学」の構築に取り組んでいます。「四国学」のお遍路文化、地域史、地場産業、自然環境、防災対策などについて、e ラーニングを導入して広く学習できることは四国に関心をもつ者にとって有り難いことです。

そしてこの四国学の上に画かれる四国の未来図はより確かなものになるに違いありません。

「四国学」概念図



資料：「e-Knowledge コンソーシアム四国」ホームページ (<http://www-ek4.cc.kagawa-u.ac.jp/learn/>)

②は「緑の島として四国」を位置づけ、高知県が進めている森の工場（団地化）を先進モデルとしてこれを地域全体に広げようとしており、この成果は森林国日本の在り方をも示唆するものです。

③は「四国の食」のブランドの確立に向けて、農山漁村の 6 次産業化を推進しようとしています。“食”は人間の生活と生存の基本であり、これを支える農山漁村が消滅することは是非とも食い止めなくてはなりません。このためには、1 次、2 次、3 次産業を融合し

た6次産業モデルを四国において実現しても
らいたいものです。

④の健幸支援産業創出事業（医療、介護、
康関連）が超高齢社会の先進地である四国に
おいて、いかに展開されるかは注目されるこ
ろです。

⑤は、四国が自立し、持続的に発展するた
めの四国全体の地域力—交通基盤、物流施策、
都市機能の強化は県行政を超えた取り組みが
求められます。

⑥の防災力向上プロジェクトはなによりも
南海トラフ巨大地震への対応強化です。これ
には国とも連携して四国の各関係機関が一体
的に連携して取り組むことが要請されていま
す。

⑦は山、川、里（まち）、海をつなげる取
組みとして「里海」というコンセプトによっ
て四国の抱える島嶼部の活性化を図るとい
うアイデアが秀逸です。

⑧のお遍路を活かしたまちづくり、地域づ
くりは四国ならではのものでしょう。弘法大
師（空海）縁の霊場八十八ヶ所巡りは、文字
通り四国を一周する巡礼であり、大人にとっ
ても子供にとっても地域学習の格好の教材と
なります。

そして、近年忘れられつつある風土の中
にある根元、宗教性を体験することはこれか
らの落ち着いた成熟社会にとっては不可欠の
ものといえます。

⑨の瀬戸内フィールドミュージアムプロジ
ェクトについては、様々な企画があると思わ
れます。東京の私の仲間も参加した「瀬戸内
芸術祭」には今年、来場者が100万人を超
たと報告されています。瀬戸内海は四国にと
っても生活と文化、産業の主舞台に違いあり

ません。

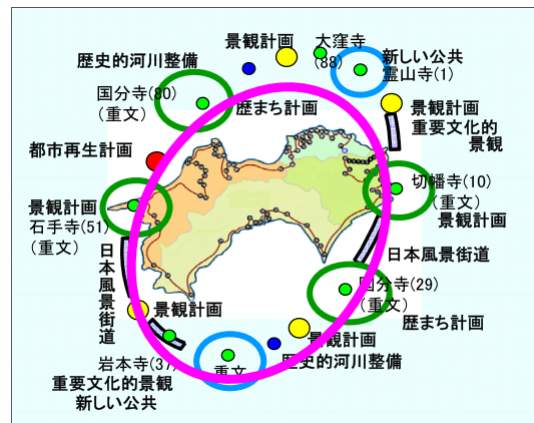
⑩の黒潮洗う南海輝きプロジェクトには、
漁業の振興策もさることながら、太平洋に開
かれている四国のロマンが感じられます。

3. 成熟社会の道州制モデルとしての四国州 のイメージ

日本列島主要4島のうちでも四国は中国、
近畿、九州に三方を囲まれたコンパクトな歴
史のある居住空間です。

現在、この人間の居住空間に日本社会の動
向を先取りするかたちで人口減少、超高齢社
会が現れ、愛媛県を除く3つの県で人口が
100万人を割った状態にあり、県単位での行
財政運営に問題が生じております。加えて近
未来に予測される南海トラフ地震については、
太平洋側と瀬戸内側地域の一体的防災減災対
策が不可欠です。

四国八十八箇所遍路道保存活用イメージ



資料：『四国圏広域地方計画 リーディングプログラ
ムの概要』四国圏広域地方計画協議会、平成
25年9月

これらの課題、弱点について「四国広域地
方計画」は「四国は一つ」を合い言葉に立案
されております。古くは古事記の国産みの物
語においても、四国は4つの顔を持つ一つの
胴体と記述されております。まさに四国は個

性的な地域を持ちつつ、地政学的にも一体的大地域で、その歴史的証拠が四国を数珠つなぎする八十八ヶ所巡礼の輪です。

四国は南を広大な太平洋に面し、北は日本最大の内海、瀬戸内海に面し、東は紀伊水道、西に豊後水道と、固有の自然、地理的条件の中で緑豊かな四国独特な人間居住環境を築いてきました。

現在、日本全体が突入している少子高齢化、超高齢社会とは成長型のものというより、究極的には民族の持続可能な成熟社会、情愛のある人間社会に違いありません。

緑の島、四国はまさにこれを実現しつつあります。「四国は一つ」を行財政上、実体化する「四国州」に踏み切る条件は整っているものと思われま

す。「四国州」となった場合の「州都」については、瀬戸内側か、あるいは太平洋側、土佐とするか、あるいは巡礼型で徳島、高松、松山、高知とするなど、いくつかの選択肢が思い浮かびます。

日本国土の道州制、区割りの議論において、四国をまとめた一州とする案の他に、瀬戸内海を挟んで、中国圏と一体とすべしという「中国・四国州案」があります。これは四国が21世紀の前半において、沈滞に陥らないためのダイナミズムを持つ上では一考すべき案と思われるのです。

【参考文献】

1. 『平凡社大百科事典』平凡社、1985
2. 『四国圏広域地方計画』国土交通省、平成21年8月

3. 『四国圏広域地方計画 リーディングプログラムの概要』四国圏広域地方計画協議会、平成25年9月
4. 『四国圏広域地方計画の進捗状況について 概要』四国圏広域地方計画協議会、平成25年9月
5. 『山川日本史総合図録』山川出版社、1991年1月
6. 『古事記（上）全訳注』次田真幸、講談社学術文庫、2013年3月

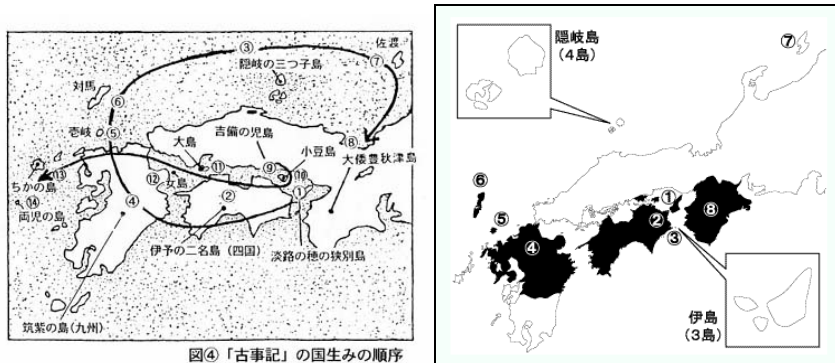
(2013. 11. 25)

瀬戸内海・紀伊水道・豊後水道・太平洋に囲まれた四国



(筆者が加工)

日本最古の歴史書、古事記などによる国産の順序



1. 淡道 (あわじ) の穂 (ほ) の狭別島 (さわけしま) (淡路島)
2. 伊予二名島 (四国)
3. 隠伎の三子島 天之忍許呂別 (あめのおしころわけ)
4. 筑紫島 (九州)
5. 伊伎島 天比登都柱 (あめのひとつばしら) (宍岐島)
6. 津島 天之狭手依比賣 (あめのさでよりひめ) (対馬島)
7. 佐渡島
8. 大倭豊秋津島 天御虚空豊秋津根別 (あまつみそらとよあきつねわけ) (畿内)

資料：ホームページ「阿波と古事記」

(<http://www.meirin.org/snoopy/history/kojiki/index.html>)

(http://park17.wakwak.com/~happyend/kojiki/awa/awa_01.html)